

プログラム名	東京テックイノベーションプログラム	必修・選択	必修	コマ数(1.5時間/コマ)	3					
科目名	東京テックイノベーション特別演習 2	教員名	牧野 見学先企業からの講師							
(英文表記)	Tokyo-Tech Innovation Special Practice 2									
概要	<p>実在のものづくり企業 2 社（ベンチャーキャピタル会社社長、地域スタートアップ支援プラットフォーム設立者、会社役職員等）の実践的な経営実態の講義を受けるとともに、保有技術の見学を行う（1,2 コマ目）。</p> <p>履修生は、上記 2 社の社内外状況を SWOT 分析、クロス SWOT 分析で整理し、独自の経営方針を提案、プレゼンテーションを行う（3 コマ目）。</p> <p>以上より、事業のマネジメントに関する知見を集積、演習により体得する。</p>									
目的・狙い	<ul style="list-style-type: none"> 複数の実践的な経営実態をもとに、議論を繰り返すを通じて、実践的な起業力・経営力を修得する。 受講者自身が自ら考えて回答を導き出すことにより、受講者自身が主体的に考え方を修得する。 									
履修条件 (履修数の上限、 要求する前提知識 等)	<ul style="list-style-type: none"> 本科目では SWOT 分析、クロス SWOT 分析をおこなう。講義前までにあらかじめ各自学修すること。 PC を用いた資料作成、プレゼンテーション、Web 会議を行えること（講義開始前までに各自準備すること）。 講義に関する連絡は LMS(manaba) を通じて行えること。 現地見学においては、平日、日中、夜間の場合でも出席できることが望ましい。出席ができない場合は、見学時のビデオを視聴、あるいは資料を参照し、課題レポートを提出することとする。 									
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 実在のものづくり企業 2 社のビジネス環境、ステークホルダー、ポジショニング、ビジネスモデル、戦略、組織構造、オペレーション、ビジネスの制約や課題などを理解し、SWOT 分析、クロス SWOT 分析でまとめることができる。 上記分析結果をもとに、独自の経営方針を提案、プレゼンテーションできる。 									
授業実施形態 (単一または複数から構成される)	形態	○は実施を表す	特徴・留意点							
	対面型	○	現地見学は対面を原則とする（1,2 コマ目）ただし出席が困難な場合は、オンライン動画視聴、配布資料を参照して自修し、プレゼンテーション資料を作成、後日（3 コマ目）発表する。							
	ハイフレックス型	○	3 コマ目の発表のみハイフレックスとする。							
	オンライン型	○	現地見学（1,2 コマ目）が困難な場合は、オンライン動画視聴、配布資料を参照して自修し、プレゼンテーション資料を作成する。							
	その他									
授業外の学修	<ul style="list-style-type: none"> 興味を持った項目についてはインターネットや書籍などで自主的に学修を進めていく。 本科目では SWOT 分析、クロス SWOT 分析をおこなう。講義前までにあらかじめ各自学修すること。 									
授業の進め方（グループワーク方式など、進め方の特徴）	<ul style="list-style-type: none"> 実在のものづくり企業 2 社（ベンチャーキャピタル会社社長、地域スタートアップ支援プラットフォーム設立者、ものづくり会社役職員等）の実践的な経営実態の講義を受けるとともに、保有技術の見学を行う（1,2 コマ目）。 履修生は、上記 2 社の社内外状況を SWOT 分析、クロス SWOT 分析で整理し、独自の経営方針を提案、プレゼンテーションを行う（3 コマ目）。 									
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーション資料の提出、プレゼンテーションの結果をもとに、到達目標と照らしあわせ、合否判定を行う。 									
教科書・教材	<ul style="list-style-type: none"> 教科書は特に指定しない。 配布資料がある場合は講師より提供する。 									
参考図書	<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて提示する。 									

東京都立産業技術大学院大学の授業実施形態に関する用語等について

本学では授業実施形態に関する次の用語を用います。かっこ内は省略語を表します。

本学の授業には、以下①～③の形態があります。1科目15回の授業の中で、各回における①～③の授業形態は、あらかじめ決まっています。詳しくは、シラバスを参照の上、初回授業等で担当教員へ確認してください。

①対面型授業 [対]

教室の開講：あり、遠隔（Web会議システムによる同時視聴）：なし、ビデオ録画：あり

②ハイフレックス型授業(オンライン) [ハ(オ)]

教室の開講：あり、遠隔：あり、ビデオ録画：あり

※ビデオ録画は復習用とし、出席はオンラインで確認する。

③ハイフレックス型授業(録画併用) [ハ(録)]

教室の開講：あり、遠隔：あり、ビデオ録画：あり

※ビデオ録画を視聴することにより、出席の扱いとする。

④録画視聴型授業 [録]

教室の開講：なし、遠隔：なし、ビデオ録画：あり

※学生の参加の方法については、各授業回の特性に応じて講義担当者によって指定するものとする。

授業によって、各コマごとに異なる授業形態となる。シラバスの記載内容、そして各講義の冒頭やmanabaによる指示に注意すること。

これ以外に、本学でも用いる次の用語を掲げます。

- グループワーク：少人数からなるグループを構成し、グループ内またはグループ間の議論やプレゼンテーションを経て、気付きや啓発を受けることを目的とする授業実施形態の一種です。
- LMS (Learning Management System)：学習管理システムを意味する。本学はmanabaを使用しています。

授業実施形態を含め上記の定義は、他の機関で少し異なる場合がありますが、本学は上記の定義を用います。

上記の用語に関する内容で、本学の履修に関する注意事項として次があります。

【履修の注意事項】

- 各授業には、教育の質を保証するために、履修条件が設けられています。この条件には、教室／施設の許容人数、または、要求される前提知識などです。履修条件は、各授業のシラバスで説明されています。
- 教室／施設の許容人数を超えたときの対処は授業内容に依存するため、授業担当教員からその対処がシラバスで説明、または事前にLMSまたは大学掲示板などで周知されます。

- 本シラバスの目次には、カリキュラムの体系は維持されるが、次年度以降非開講となる科目が含まれる場合があります。

上記とは別に、参考として、授業実施形態を表す文部科学省の用語を次に紹介します。

- **同時性**：教員と学生間、または、学生同士の間での講義や議論などの情報伝達がリアルタイムに行われる性質を意味する。同期性とも称される。この反対語が非同時性（非同期性）です。
- **双方向性**：教員と学生間、または、学生同士の間で質疑応答や議論が双方向に情報伝達ができるることを意味する。

これらの性質について、教室での議論は2つの性質を両方とも満足していることはわかるでしょう。次に、LMS上で質疑応答の書き込みを考えます。これは、質問（学生⇒教員）に対して回答（教員⇒学生）があるという点で双方向性を有しているとみなされます。また、質問に対する回答が1日程度後にされるとします。この遅延の程度が授業の内容上許容されるならば、同時性は確保されているとみなされます。他のメディアを利用した場合も同様です。

大学院の授業は、この両方の性質を満たすことが求められています。このことは大学院設置基準に記載されています。ここに、授業形態の説明は大学設置基準の規定（大学設置基準第二十五条第二項）を準用しています。

【単位の計算方法】

単位の計算方法は次の大学設置基準第二十一条に従っています。

第二十一条 各授業科目的単位数は、大学において定めるものとする。

2 前項の単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもつて構成することを標準とし、第二十五条第一項に規定する授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、おおむね十五時間から四十五時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位として単位数を計算するものとする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める時間の授業をもつて一単位とすることができます。

3 前項の規定にかかわらず、卒業論文、卒業研究、卒業制作等の授業科目については、これらの学修の成果を評価して単位を授与することが適切と認められる場合には、これらに必要な学修等を考慮して、単位数を定めることができる。

これに従い、本学は次のように学修時間を定めています。

- 講義、演習、実習など特別演習科目以外の科目：2 単位科目の場合について説明します。これは、 $2 \text{ 単位} \times 45 \text{ 時間} / \text{単位} = 90 \text{ 時間}$ の学修を必要とし、これには、授業と授業時間外学修（予習や復習など）に要する時間が含まれています。授業時間は、授業準備等を考慮して 90 分授業を 2 時間と換算し、これを 15 回実施します。授業時間外学修は（90 時間 - 授業時間）となります。ただし、試験時間はこれとは別途に設けています。1 単位科目の学修時間について、本学は別途定めており、該当する科目的シラバスを見てください。
- 特別演習科目：いわゆる PBL 演習を指しており半期 6 単位です。半期当たりの学修時間は $6 \text{ 単位} \times 45 \text{ 時間} = 270 \text{ 時間}$ を要します。本科目の学修形態は様々ですから、一律に授業時間、自習時間等を定めてはいませんので、担当教員の指示に従ってください。